

本多静六通信

第18号

発行
本多静六博士会
を顕彰する

本多静六と早稲田



早稲田大学
名誉教授
村山吉廣

林政経済を講義

『本多静六体験八十五年』（講談社・昭和27年刊）に次のようにある。

帝国大学以外に大隈重信氏の依頼により、早稲田専門学校（早稲田大学前身）の講師を嘱託され、明治二十七年より早稲田の学生に、林政経済及び農政経済学の教鞭をとることとなったので、私体が二つあっても足りない位の忙しさで、毎夜一時頃まで講義の原稿を作り、時には夜明かしすることも少なくなかった。

当時の早稲田の様子については別の所で次のように記している。



明治23年ごろの東京専門学校

内外はこれまた泥だらけの有様だった。茗荷畑と田圃の中に建てられたという草創期の早稲

私は大隈校長に頼まれて、毎土曜日の午後、駒場の農大官舎から三里余の悪路をテクって早稲田に通ひ、林政経済学を二時間づつ講義していた。天気の日も大変だったが、雨天のときなどは、駒場の門外へ出ると、たちまち道玄坂下、水田中の悪路に悩まされ、さらに早稲田圃の泥路に足を取られながら、漸く講壇に辿りつき汗を拭きつつ講壇に立ったが、講壇の

田の状況が活写されているが、駒場から三里余の道を歩いて出講したというのも明治20年代ならではの話である。

しかし当時の早稲田の学生は反権力の政治青年が多くて荒っぽく講義に手こずったようだ。そこで学生たちの気持をひきつけるため講義に工夫をこらした。それは講談師真竜斎貞永から秘伝を受けてその調子をとり入れたことであつた。「私がのちに、講談もどきの本多さん」と学生たちにアダ名されるようになったのは、まったく早稲田のお陰（？）であつた」と伝えている。

愛弟子増田義一

右の二つの逸話は「五十年前の増田義一君と私」（『増田義一追懐録』実業之日本社・昭和25年刊）に書かれたものである。本多は更に次のようにも述べている。

早稲田における私の講義講義を最後まで熱心に聴いてくれたのが増田義一、光岡威一郎君ら十数名であつた。

本多は大学卒業後の増田を高等官待遇の林務官に推薦したりしている。この推薦は政変のため実現しなかつたが、増田はやがて実業

之日本社を創設して雑誌界の雄となった。本多はさらに次のようにも記している。

増田君が「実業之日本社」を主宰するに至つた前後は、私は他方に博文館その他にも関係していたため、他の雑誌に追隨を許さぬ特徴―例えば実業界向きの雑誌をなすことを目標に色々相談を持ちかけられたが、増田君の経済的経営の才能には、そのころからひどく敬服していたものである。

増田義一は新潟県中頸城郡旧板倉村の出身。後に本多が講談社の野間清治と並べて日本雑誌界の二大人物として推賞したが、広く経済界・政界にも活躍し、昭和6年には衆議院副議長となつている。人格円満で信望厚く書もよくし、少年教育、社会事業にも大きく貢献した。号を奎城と称した。

本多は同社から明治30年に『林政経済学』、昭和24年に『私の財産告白』、25年に『私の生活流儀』、没後の26年に『人生計画の立て方』を出版している。同社とのくわしいかわりについては本誌16号（平成19年3月刊）に同社管理部長・編集長の岩野裕一氏の書かれたものが掲載されている。

大隈さんと静六

静六が早稲田に出講したのは早くから大隈に親しみを持っていたからで



大隈重信 多静六体験八十五年

ように言っている。

私の(外国からの)土産話を必ず聞く人が、(後藤新平の)ほかにも二人あった。一人は大隈で今一人は渋沢(栄一)であった。大隈は一を聞いて十を知るといふ類で、私を晩餐に招待して、いろいろ腑に落ちるまで突込んで質問するが、翌朝の来客には、もうそれが大隈の新知識として三倍位に拡大されて吹聴されていた。私は大隈の記憶力とその応用の才には敬服したが、時には仕入先を忘れて卸し屋にまで押し売り説法をすることがあるので、一再ならず苦笑させられた。

このようにして縁の深かった早稲田では林政経済の講義のほかに「科外講義」でも出講を煩わしている。「科外講義」とは明治20年の草創期に「实际的・応用的ノ課目、及び未ダ正課トシテ授業スル

ヲ得ザル学科ノ大要ヲ講義シ、学生ヲシテ正課研究ノ補益トナサシム」という趣旨で設けられたものである。

明治27年6月刊の『中央時論』(のちの「早稲田学報」)3月号には「科外講義及び演説」と題して次のような記事がある。

先月中、大学教授・仏国博士ミッシェル・ルガン氏を聘す。氏は「日本人と仏文学との関係」という演題にて文学上に関する講義をなし、又本月本校講師・雅芸博士口イド氏の「吾人は先づ如何なる書を読むべきか」という愉快なる演説あり。又、農科大学助教授・林学士・ドクトル・エコノミー・ブリーク本多静六氏を聘し、五月十九日より引き続き毎土曜日の午後一時より科外講義を聞く。演題は「帝国林政革新私議」にて、大に我国森林制度の不可なるを痛憤し、その革新を論ぜられ、頗る有価の講話なり。

このほか本多は大講堂で定期的に行われていた講演会・演説会にも当時の名士の一人として登壇している。その一覧表によると、明治30年10月16日に記録があり、その時本多は「台湾体験談」を語つ

ている。その前後には10月2日に島地黙雷の「仏教の大意」、11月20日にフエノロサの「東西文明の比較」の演目がある。

首かけ銀杏の葉の陰に



首かけ銀杏の前で

私は春日部市の生まれであり、兄が読書家だったので、少年時代、家には本多静六の著書のいくつかがあった。「四分の一天引き貯蓄法」とか「職業の道楽化」とかは子供心にも興味を持った。同じ埼玉の人であるから「郷党の先輩」として長く敬意を持っていた。私の奉職した早稲田にも草創期にずいぶん尽くしてくれ、大隈さんともよい関係であったということ、うれしいことである。

ここでこの一文の執筆に当たって本多への思いを新にするために日比谷公園のあの名高い「首かけ銀杏」を訪ねてみた。公園一の名木だからこの木の下に立ってその梢を見上げる人は絶えなかった。外国人の姿もあり、英文の説

明には「首かけ」の由来について「Dr Honda said, I will have it transplanted even if my head is put on a stake」と書かれていた。戦前の説明文には「本多静六氏ハ必ず活着スベキコトヲ保証サレタ為、今ノ所ニ移植サレ、斯ク見事ニ生育サレタノデアリマス」と記されていたのである。移植に四百六十円、「約四丁」の所を運搬するのに二十五日を要したというのも時代がかっていて面白い。当時の立札には「樹ノ高サ 約二十二米(七十尺)、幹ノ廻リ 約六米(二十尺)」とあったそうだが、いまはどのくらいになっているのであろうか。大木亭々としてその下に立つ人に豊かな陰を落としてくれていますが、その一事だけでも言うにいわれぬ尊いことである。

講師嘱託記録 *早稲田大学史資料センター所蔵

Table with columns for names and dates, listing various individuals and their associated dates.

第二回本多静六賞

受賞者の紹介

埼玉県農林部森づくり課

主査 田中 誠

一 第二回本多静六賞について

県では、本県出身で日本最初の林学博士となった本多静六博士の精神を受け継ぎ、緑と共生する社会づくりに貢献した個人・団体を、平成19年度から表彰しています。

第二回本多静六賞については、平成21年1月9日まで募集を行い、個人5名及び8団体の計13件の応募があり、「特定非営利活動法人埼玉森林サポータークラブ」が受賞されましたので御紹介します。



平成21年3月長瀬町・宝登山

二 特定非営利活動法人埼玉森林

サポータークラブの概要

当クラブは、県民参加による森

林づくりを行うため、平成9年1月に「彩の国森林サポータークラブ」として発足しました。

県内の森林を主な対象として、森林の保全・育成や森林に関する普及啓発・交流事業などの森林ボランティア活動を行っています。

その後、平成14年4月に「特定非営利活動法人埼玉森林サポータークラブ」として認証されました。現在、会員数は二百四十二名で、さいたま市に事務局を置いています。

三 クラブの活動状況

○県全域で森林整備

秩父地域の急峻な山林から、都市部の平地林まで、県全域で間伐・下刈り・植栽などの森林整備に取り組んでいます。



平成21年2月越生町での植栽

平成20年度は18市町村で、約53haの森林整備を行いました。

関東一都三県の森林ボランティア団体で、年間50haを超える森林整備を行っているのは、当クラブのみです。

○年間百回を超える活動

多くのフィールドで活動しているため、ここ数年、活動回数は年間百回を超えています。

国の調査では、月に5日以上活動している団体は全国で一割に満たず、当クラブは年々活動規模を拡大している、全国でも有数の森林ボランティア団体です。

○リーダー的役割

県内の他の森林ボランティア団体と協働した森林整備や、企業の森づくり活動への技術支援を行うなど、県民参加による森林ボランティア団体の先駆けとして、リーダー的な役割を果たしています。

四 受賞・表彰式

県全域で本格的な森林整備に取り組み、年々活動規模を拡大している当クラブの活動が、本多静六賞選考委員会で高く評価され、第二回の受賞者に選ばれました。そして、平成21年5月30日に秩

父ミュージックパーク（秩父市）で開催された第60回埼玉県植樹祭「みんなで森をつくる集い」において、上田知事から北村会長に表彰状が授与されました。



上田知事と北村会長（右）

五 終わりに

当クラブは、森林ボランティアとして活動してくれる方を募集しています。詳しくは、当クラブのHPをご覧ください。電話等でお問い合わせください。

(Hd) <http://www.shinrin-supporter.org/> 電話048・814・2770)

県では本多静六賞の表彰を通じて、博士を顕彰するとともに、緑と共生する社会づくりに取り組んでいます。引き続き皆さんの御理解・御支援をお願いいたします。

本多静六博士の森づくり ～県民参加で新たに森づくり～

埼玉県農林部森づくり課

主査 榎本 敬

一 本多静六博士の森づくりの概要

「本多静六博士の森づくり」は、「彩の国みどりの基金」を活用し、森林の少ない地域に、新たに森を造成する事業です。

「彩の国みどりの基金」は平成20年度に創設されました。自動車税収入額と、県民の皆様からの寄附を財源とし、「森林の保全・活用」、「身近な緑の保全・創出・活用」、「環境に関する意識の醸成」のために活用されています。

この基金事業として、「本多静六博士の森づくり」を、平成20年度から実施しています。

本多静六博士は、明治神宮の森、東京都水源林などの造成や、日比谷公園、大宮公園をはじめとする全国の公園設計に携わり、多くの功績を残しました。

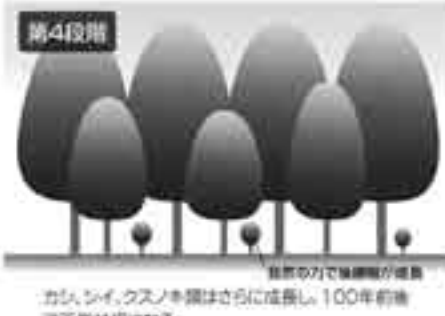
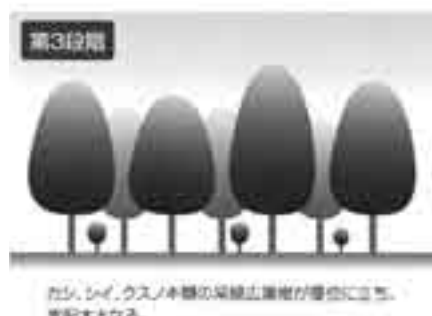
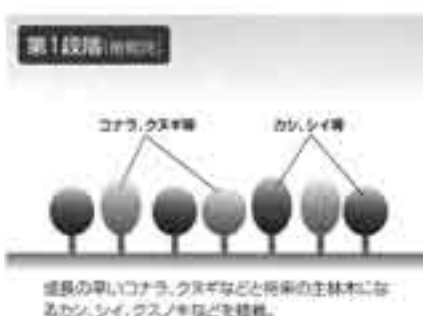
「本多静六博士の森づくり」は、博士が明治神宮の森を造成したときの、自然の力を生かした森づく

りの考え方を取り入れて行うものです。

二 森づくりのイメージ

県内に古くから生育する在来種のコナラやクヌギ、カシやシイといった樹種を中心に植栽し、森づくりを行います。

植栽後の森の移り変わりを図に示すと次のようになります。



植栽から数十年が経過すると、林床には後継樹が自然に育ちます。大きな木が倒れたり枯れたりした場合は、そこに光が当たり、後継樹が大きく成長します。

明治神宮の森は、植栽から約90年が経過していますので、右の図で示す第4段階に達しており、火事などによる大きな災害がなければ

ば、ほぼ現在の森林の状態を保ちながら永続すると考えられます。

三 県民の皆様の参加による森づくり

「本多静六博士の森づくり」の実施に当たっては、県民の皆様にご協力をいただきながら、「みんなで植えて・育てて・守る森づくり」を行うこととしています。

そこで、緑の少年団を始めとするみなさんには、植栽するドングリの苗木作りや育成に御協力をいただきました。



緑の少年団によるドングリの苗木づくり

また、植栽に当たっては、地元のみなさんに御参加いただくとともに、植栽後は、ボランティア団

体等と協定を締結して、草刈り等の手入れをお願いするなど、地域のみなさんの手で育てていただく森づくりを進めています。

四 森づくりの第一号は

菖蒲町で

○経緯

この事業を実施するに当たり、菖蒲町内で県企業局が造成する菖蒲南部産業団地内の公園予定地が候補地となりました。

この公園は、完成後に菖蒲町に引渡される予定であり、町とも調整したところ、森づくりに快諾をいただきました。

このように、本多静六博士の生誕の地である菖蒲町で、第一号の森づくりを実施することとなりました。

○森づくりの概要

・ 植栽場所

菖蒲町三箇地内

菖蒲南部産業団地内の公園の一部

・ 植栽面積

0.2 ha

・ 植栽本数

約500本

(コナラ、クヌギ、エゴノキ、シラカシ、スダジイほか)

○三箇小緑の少年団による苗木の育成

三箇小学校では、全校生徒で、校内の緑化活動や学校周辺の美化活動等を行う「緑の少年団」を組織しています。

植栽するコナラ、クヌギの苗木240本を、この三箇小緑の少年団に育てていただきました。

苗木は、県内で採取したドングリを播いて育てたものです。



ドングリから育てたコナラの苗木

○植栽の実施

植栽は、平成21年2月23日に行われました。

あいにく、冷たい小雨が降る中の植栽となりました。

しかし、中山菖蒲町長、本多静六博士の孫である本多健一氏をは

じめ、たくさんの方々に御参加いただきました。

雨模様のため、参加が危ぶまれましたが、三箇小学校からも6年生30人が参加し、自分たちが育てた苗木を植栽しました。(5年生以下の皆さんには、後日、天気の良い日に植栽いただきました。)

また、菖蒲中学校からも、25人の生徒さんに参加いただき、足元の悪い中、泥んこになりながら植栽してもらいました。



育てた苗木を植栽する小学生

○植栽後の管理

皆さんに植栽していただいた木は、手入れをしなければ森に育ちません。特に、植栽後の5年くらいまでは、下草の繁茂が旺盛で、年に数回の下草刈りが必須となり

ます。

菖蒲町で行われた森づくりにおいては、事業実施者である県、土地所有者である菖蒲町、そして、お手伝いいただくボランティアとして「本多静六博士を顕彰する会」が協定を締結し、それぞれ役割分担し、植栽後の管理をすることとしていきます。

写真は、今年の夏に、本多静六博士を顕彰する会の皆さんが中心となり行った活動の様子です。

今後数年間は、大変な作業が続きますが、立派な森となるように、引き続き御協力をいただきたいと存じます。



草刈りの様子

五 これまで行った本多静六博士の森づくりの概要
 第一号地である菅浦町の他に、現在(平成21年11月末)までに4箇所で森づくりを行いました。



作業完了後



植栽木を支柱に固定

○羽生水郷公園

羽生水郷公園の北西部に、植栽しました。

1500本の苗木のうち1025本は、家庭の省エネ・省資源活動「エコライフDAY」に取り組んだ県内の小中高校の参加の証として植栽しました。

植栽地は、植栽前にはヨシが一面に繁茂しており、手入れが大変ですが、11月には地元自治会の皆様を中心となり、草刈りや耕運して細かくなったヨシの根っこ拾いを行いました。

- ・ 植栽面積 2.8 ha
- ・ 植栽本数 1500本
- (コナラ、クヌギ、ケヤキ、エゴノキ、シラカシほか)

○芝川第一調節池

さいたま市緑区にある、芝川第一調節池に隣接する未利用地に植栽しました。

森づくりに当たっては、森林ボランティア団体の「NPO法人埼玉森林サポータークラブ」に協力をいただいています。

サポータークラブの会員には、エンジン式草刈機をお持ちの方も多数おり、大変な作業の草刈りで

したが、短時間で終わることができました。

- ・ 植栽面積 0.6 ha
- ・ 植栽本数 900本
- (コナラ、クヌギ、ハンノキ、クスノキ ほか)

○利根川強化堤防

国土交通省が進めている利根川の強化堤防(大利根町)の法面に、国、県が連携して森づくりを行いました。

植栽、草刈り等の手入れは、栗橋ロータリークラブに協力をいただいています。

今年度は、数回の草刈りを行い、そのうち1回は、地元の自治会やボーイスカウトのみなさんにも御参加いただきました。

- ・ 植栽面積 0.4 ha
- ・ 植栽本数 300本
- (コナラ、クヌギ、シラカシ、クスノキほか)

○本庄市森と泉公園

本庄ロータリークラブが「みどりの基金」を活用して行う森づくりと共同して、本庄市森と泉公園に植栽しました。

植栽後の管理は、ロータリーク

ラブのほか森と泉公園愛護会の皆様にお願いくることとしています。

- ・ 植栽面積 2.4 ha
- ・ 植栽本数 420本
- (コナラ、クヌギ、エゴノキ、ミズキ、エノキほか)



寄居中町ジュニア緑の少年団が育てた苗木を植栽(本庄市森と泉公園)

六 終わりに

県では、今後も、県内各地で「本多静六博士の森づくり」を実施する予定です。

皆様の御協力をいただきながら、地域の憩いの場となる森づくりを進めてまいりますので、引き続き御支援くださいますようお願いいたします。

見守ることを誇りとして

三箇小学校長 板東 恵子



いますが、それまで元気でいたいです。『もつと、もつとじょうぶに育ちますように』と、心の中で話しかけています。』子ども達の何気ない呟きの中に、本多静六博士の遺徳を受け継ぐ心根が、しっかりと育ちつつあることを、実感しています。

顕彰する会の皆さんの指導を受ける子ども達

雨で延びた10月19日、雲ひとつない青空に後押しされながら、「静六の森」の除草作業が始まりました。今日の日を楽しみにしていた3、4年生は、真先に自分の植えた大切な木を捜しています。

木を捜しています。

「あつた、あつたよ。手の平の大きさだった木が、ぼくの肩より伸びている。」

「6年生の植えた木は、あんなに

「ぼくの植えた木が、百年後は立派な大木になっていると思うと、うれしくて、うれしくてたまりません。ぼくは百十歳になつて



小山先生の指導を受ける子ども達

今年は、小山先生の講話をいただきました。

さらに、夢の森タイムでは、3年生が「本多博士と友達になろう」4年生が「ようこそ大先輩本多博士」、5年生が「本多博士と一緒に自然を守ろう」、6年生が「本多博士とともに世界へはばたこう」の学習を通して、本多博士の生き様や業績を学んでいます。

大きくなっているのに、私は、まだ小さいなあ。」
どの子ども、自分の植えた木をしっかりと覚えているのです。根元にもみ殻をかけている人、小枝を拾う人、草を取っている人、みんな一所懸命です。優しい息をかけている人もいます。自分の植えた木として深い愛着を寄せるその

様は、かつて、静六博士が、『首かけイチョウ』に決意をした、その心に通じるようにも思えてきます。

三箇小学校では、博士の誕生日の週を、「本多静六博士週間」として、道徳の時間に、博士を教材化した授業を行っています。また、博士ゆかりの人を招いて、博士の話をうかがいます。

小山先生をはじめ顕彰する会の皆さんとの除草作業は、教室で学んでいることを実現する貴重な経験となりました。

「この森は、多くの方々の願いが込められた、大切な森です。私達は、この森を永遠に繁茂させ、



願いを込めながら世話をする子ども達

未来につないでいかななくてはなりません。」

そんな博士の声が、聞こえてくるようです。見守ることを誇りに思える子ども達の育成に、これからも全力で取り組んで参りたいと思います。

十月十九日に私は、本多静六博士の森林に手入れをしに行きました。私が植えた木に行ってみました。植えた時より大きくなっていました。森の辺りも固く育ちました。すくなく大きくなって、木はさきに植えた六年生の木やした。植えて数か月しかたてないのにすこいです。私の木はまだ小さかたけと前よりは大きくなっていました。とてもよかったです。次に太い木のえだを拾いました。森はきれいになりました。よかったです。

五年後が楽しみです。

四年一組(市村奏南)

十月十九日に本多静六博士の森の手入れをしました。木をえだにひもで結ぶ作業をしました。はくは自分の木にひもで結ぶたくて自分の木をえがしていると、自分の木がすくすくと育っていて、安心しながらひもを結びました。

木にくわしい小山先生から、あと二年したら今の木の倍に育つよ、と聞いたので来年かまちとおもしろいです。

百年後の本多静六博士の森林の様子を想像していると、わくわくしてきます。

四年一組(安住 龍二)

ゆかりの地訪問に参加して

～思うこと～

菅蒲町三箇 小林 晴夫



9月30日、本多静六博士を顕彰する会主催の水戸偕楽園、弘道館訪問に参加した。その節小山会長より見聞、所見の原稿依頼があり、浅学非才を省みず受諾した次第です。

村山吉廣早稲田大学名誉教授の「芳川波山の生涯と詩業」の出版記念講演が8月22日埼玉県行田市で開催され、「歴史は己の脚で調べるもの」と教示された。

早速、生家折原家を始め、近県の公園と明治神宮（ドイツ、ターラントで学んだ天然更新）、東京慈恵医科大学（詮子夫人）、青松寺（墓）等ゆかりの箇所を廻ってみた。偕楽園訪問の故で金沢兼六園、岡山後楽園を旅することもできた。偕楽園の軍用貯梅、好文亭の衆と偕に楽しむ、弘道館では武田耕雲斎を始め藩士達を学ぶことが出来た。

博士の偉業で顕著たる明治神宮を10月7日に訪れた。一の鳥居近くの郷土の献木楠木を拝みつつ、小雨降る鬱蒼とした砂利道を本殿へと歩む。博士が百年後を見据えて植栽した木々は濃霧に包まれ、その隙間から参拝者の玉砂利の軋む音のみの神域であった。明治神宮造営は博士と弟子により仁徳天皇御陵を想定されたと言われ、百年を迎えようとしている。今の森（杜）は博士の自然更新させる遷移理論の基に実証されているのが落ち葉の管理を観て極々と伝わってきた。

博士を山林学校に入学を勧め、博士の人間形成に大きく寄与した遷喬館の始祖児玉南柯の遺風を引き継いだ島村泰を知りたくなり、岩槻遷喬館に赴いた。残念ながら史料は見当たらず担当者のはからいで児玉南柯を公民館で読むことができた。四分の一貯蓄である静六博士の処世訓は南柯より泰に継承され学んだことと思われた。

11月14日、静六博士嫡孫の本多健一東京大学名誉教授の祖父静六とご自身の研究についての講演に浴することができ、更に静六博士を知りえた至福の一日であった。

最後に、静六博士が学んだ地元三箇小学校では、小生の曾祖父望が明治6年から初代訓導として41年間奉職し、祖父好三は明治24年



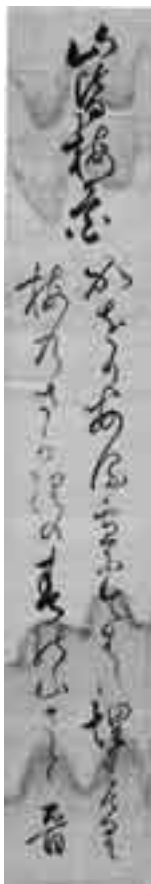
小林五郎 会津戦争参戦後、帰郷時の写真 仲間某氏と

に同校を卒業している。博士のドイツ留学を支えた養父本多晋は彰義隊隊長であった、高祖父小林五郎は忍藩士で、共に道は違っていたが戊辰戦争で相戦っている。

明治になった後は本多晋と曾祖父望とは和歌を通して親交を重ね、名家の短冊として久しく保存されていた。

この短冊を通じて本多晋の徳が偲ばれ、ここで初披露として結びと致します。

和歌題目は山皆梅花です



（かをりある雪に今はた埋もれけり 梅のさかりの春の山と 晋）

雑誌から知った

—本多静六博士の妻
詮子夫人の内助の功—

副会長 柴崎 一
(17号から続く)

三、詮子夫人の遺言

博士は、自分自身を語るには、



本多博士(左端)と家族の団らん

妻詮子夫人について語らねばならないとして、「本多静六自伝 体験八十五年」の中で亡妻詮子のこゝととして、「妻は私の半身」であり、30年近くの大学教授生活の間、百冊にも及ぶ執筆活動や後顧の憂いなく研究活動に没頭できたこと、子育て、家庭のもろもろのやりくり、特に日常は家事一切を済ませ、

子ども達を休ませた後、博士が研究室より遅くなって帰ってくるまで、助手として原稿の整理、原書の翻訳、手紙の代筆など研究以外の仕事(雑務)を片付け、大学の研究に専念できる環境づくり心がけ、彼女自身を滅却して博士に尽くした事への内助の功について感謝し、

「彼女の存在なくして、今日の私はあり得なかつたかも知れない・・・。」と語っている。

詮子夫人は、大正10年12月25日夕食時、突然脳出血で倒れ、博士、5人の子ども、5人のお孫さん達に見守られながら、この2日後、58歳の生涯をとじられた。

詮子夫人は、生前博士に対し、「学者が学術のために尽くすのは、当然のことながら、その一面に於いては、国民として公共のために尽くさねばなりません。あなたも、ある時期を劃(か)して、公共のために貢献してください。」とのべたという。

静六博士は、以後公共のための活躍は、枚挙に遑(いと)が無い。(了)

本多静六博士ゆかりの地

—由布院温泉発展策に学ぶ—

副会長 柴崎 一

最近、若い人々の間で人気絶頂の温泉地といえば、大分県由布市の由布院温泉と熊本県阿蘇郡小国町の黒川温泉だといわれている。

その一つ、由布院温泉に本多静六博士を顕彰する事業として平成20年10月に訪問、博士の「発展策」を研鑽した。ところで、博士がわざわざ足を運んで講演した「発展策」が、由布院温泉の発展のためどのように生かされたのか大変に興味があったので、平成19年6月個人的に尋ねたことがある。このとき知り得たことも含め、まとめてみたい。

「湯布院と由布院はどちらが正しい呼名ですか。」平成19年6月尋ねた折、タクシーの運転手に尋ねた。「どちらも正しい。」との答えであった。そう云えばJR久大本線(大分から久留米を結ぶ鉄道)の駅名は「由布院」である。そもそも現在の由布市は、昭和30年に由布院と湯平村が合併して湯平村の「湯」と由布院の「布院」をとり湯布院町が誕生し、平成17年10

月1日、狭間町、庄内町、湯布院町が合併して現在の「由布市」が誕生した。

由布院は、古くは万葉の時代から書物、詩歌にも登場し、由布院盆地の中に位置し、豊かな自然と日本を代表する温泉に恵まれ、雄大な自然、歴史文化は「九州の軽井沢」とも云われている。

現在の由布院温泉は、年間延べ380万人もの観光客が訪れるとのこと、驚くべき数字である。ただ不思議なことは、他の観光地にくらべて、特別な名所旧跡があるとも思えない。大変に合点がいかにぬことが多い。この不思議な現象を解き明かすには、本多静六博士の「由布院温泉発展策」と全く無縁ではないように思えるのである。大正13年頃の由布院は、環境的に大きな転換期にあったようだ。

その一つには、鉄道の開通を翌年(大正14年)に控えていた。現在の久大本線(大分から久留米を結ぶ区間)二つには、自動車の通れる道路で現在の国道210号線の開通を真近にしていた。

このため、村の人達は自分たちの居住環境づくりに期待と不安をいだいていたという。

こうした村人の気持ちを感じ取った本多博士は、大正13年10月11日当時の由布院村立綿蔭尋常高等小学校(今の由布院小学校)の講堂で溢れんばかりの聴衆を前に「由布院温泉発展策」と題して講演をした。博士は、この講演の結びで次のように説いている。

「以上未熟な私の僅か一日間の調査による意見が、幸いに当由布院温泉の発展上に資し、併せて文化生活上裨益する所あらば私の大いに光栄とし感謝するところであります。」

この講演から2008年の10月で85年の歳月が経過したわけであるが、現在の由布院温泉の町並が博士の発展策とどのような係わりを持ち、どのように町づくりに生かされたのか、大変に興味あることである。

■由布院温泉発展策の柱(博士のことば)

文化生活の基本とは、他人の力によらず、自らの力で周囲の人々を幸せにしながら生きること、つまり一人ひとりが健康であることが大切である。健康であるためには、常に次の3つのことに注意する必要あり。

①美しい環境②十分なる日光③新鮮な食物

博士の3つの条件について、由布院温泉は十分に満たしているように思う。

先ず、地理的位置関係は、由布岳(標高1584米)の西南の山麓に広がる由布院盆地にあり、秋から早春にかけては気温差が激しいため朝霧に包まれることが多い。幻想的な光景を見ることができ、特に狭霧台から見下ろす町の風景は、パノラマ写真を見ているようである。

ところで、現在の湯布院町では地場産の食材に恵まれ、新鮮な食物にはこと欠かない。なかでも由布院牛は、狭霧台より見下ろす山麓の草原にのんびりと牧草を食している光景が映るし、大豆などを含め農産物や山菜など豊かな食材に恵まれている。

■自然のままに美しい森林公園の中に町がある(博士のことば)

森林公園の中に由布院がある。こうすることで人は常に健康に生きることができ。では、森林公園とは如何なるものか。それは、自然の山や水の美しさを十分にアピールし、町の良好な風景が保た

れ、加えて町の人たちの運動、娯楽、静養を向上させるような森林が育まれているのが森林公園である。また、風景を構成する樹木については、松、杉、桧などの針葉樹のみでは飽きがくるので、紅葉、山桜などの広葉樹を混ぜ変化をつけることが大切である。樹木の移植も人間が植えたと解るようなことはさげ、自然に生えたように工夫することが大切である。公園内の道は、直線は避け、向こうが見えないように工夫する。蛇行させることが原則である。道路を造る場合、大木などにつき当たった場合など、大木を生かし道をう回させるなど工夫が必要である。

この博士の言葉を脳裏にきざみ、町内を散策することにしたが、時間的な関係で金鱗湖近くの家老屋敷から出発することにした。車道を挟んでの両側の歩道は、雑草が刈り込まれ、その奥にはいろいろな樹木が並んでいる。確かに緑豊かな森林公園の中



由布院 森林公園の中に湯布院町があることを実感した。

若い人たちに人気の色々な店も軒をつらねる感じでなく、ゆつたりした空間の中に点在している印象が強い。ただし、日本全国の駅前通り商店街と同様、駅通りの商店街は軒をつらねている。しかし、他の地域と違って、何となくゆつたり感と落着いた雰囲気があった。原因はわからないが交通信号機が設置されていないこと。由布駅は改札口がない駅として知られ、駅そのものがギャラリーになっているユニークな駅である。

■金鱗湖には、やたらに手をつけない。(博士のことば)

金鱗湖は、由布院盆地の中心に位置し、風光明媚で水も透き通り綺麗な湖である。しかし、湖の現時点の設備には感心できない点があり、大幅に改良する必要がある。湖へ流入する今掘川からの土砂を防止する策を講ずる必要がある。湖畔周辺の別荘は撤去し、岩と湯と水を活かして景観の整備を図る。また、湖面の拡張、湖底の浚渫、湖畔の改良、橋を架けるなど検討する必要がある。由布院の自然は岩石が多くあるので、これらを利用し、尖った部分などは最小限石工屋に削って貰い、森林公

園内に設置すれば、自然の景観を壊すことなくベンチができる。



金鱗湖

金鱗湖で驚いたことは、湖畔の一角から温泉と地下水が湧出していることである。聞く

ところによると850カ所を超える源泉の中で代表的な源泉の1つであると云う。博士の云う今掘川からの土砂の流入防止については、改良されたのかどうか定かではなかった。博士が唱えた「湖畔の宿は撤去した方が良い。」についても現在も残っており、印象として大変残念に思った。

由布院の歴史をたどると、平安時代には柏富郷というところに穀物を収穫する倉院が設けられ、「ゆふの倉院」。「ゆふ院」と呼ばれるようになったと言われている。1959年には、厚生省(現在の厚生労働省)より国民保養温泉地に指定されて一躍脚光を浴びることになった。

特に、住民の意欲と情熱を結集して、一村一品ムラおこしの先

駆的な役割を果たした湯布院町は、映画祭、音楽祭、牛一頭牧場などユニークな活動で注目された町でもあり、強力なリーダーシップを持った3人の侍、中谷健太郎氏(亀の井別荘社長)、溝口薫平氏(玉の湯社長)、木谷文弘氏(大分県庁をへて木谷ムラマチ計画研究室)、なお、木谷氏は平成21年8月故人となられる。この人達を中心に博士の発展策というアドバイスが住民の間に幅広く浸透し、行政の力強い協力も得て年間224万人にのぼる温泉客の集客力につながったといわれ、どこにも負けることのない町おこしが特筆されている。

編集後記

●.....●
本号を最後に合併により次号から久喜市菖蒲町となります。会は相変わらず、むしろこれを機に一層の充実と発展を期したいと思えます。更なるご指導とご協力を御願ひ致します。

本紙の巻頭に、早稲田大学名誉教授村山吉廣先生には、特別寄稿を頂き、本多と早稲田の関係を御教授下さいまして誠に有難うございました。隣市のお住いとあって今後

会員を募集しています

本多静六博士を顕彰する会では、会の活動をさらに充実させるため、一緒に活動していただく会員の方を広く募集しています。また、当会の趣旨にご賛同いただける団体会員の皆さんも募集しています。

入会受付…随時
年会費…個人会員1,000円
 団体会員5,000円
問合せ…本多静六博士を顕彰する会事務局

ともお導きの程、お願い致します。

埼玉県森づくり課の田中、榎本様には、本多静六博士の森づくり事業・本多静六賞の意義と実施状況について、ご紹介を頂きました。共々厚くお礼申し上げます。

小学生の皆さんが、飛び込むように森に入り8ヶ月前に植えた木を探し、嘆声と愛撫の手で支柱を誘引(しぼりつける)したり、根元の草を取る姿をご想像下さい。最高の環境体験学習ではないでしょうか? 小さな作文に大きい感動を、子供たちと木が健やかに成長することを祈り後記といたします。

【編集発行】本多静六博士を顕彰する会
《窓口》菖蒲町役場総合政策課内
〒346-0192 埼玉県南埼玉郡菖蒲町大字新堀38
電話 0480-851111(代)
FAX 0480-8511806